

## 大通公園を望む窓辺から

## 「観る将」はじめました。

常任理事 荒木 啓伸

私は将棋が指せない。入門書は何冊も読んだが、初級のコンピュータにも勝てるようにはならなかった。そこで、指すことは諦め、観戦に専念することにした。観ることに徹しているのは、どうやら私だけではないことが最近になってわかった。「観る将」と呼ばれており、観る将向けのガイドブックも出版されているようである。

将棋に関心を持つようになったきっかけは、藤井聡太さんの登場である。彼がプロデビューした当初は、ニュースで流れる彼の姿を漠然と眺めていただけだったが、いつの間にか棋戦の日程をチェックし、将棋番組を観るようになっていた。

おそらく、多くの人が藤井さんの影響で、将棋に関心を持つようになったのではないかな。ちょうど同時期に対戦中のAIによる形勢判断が、中継と同時に表示されるようになったのも、私のような初心者が観戦を楽しむことを後押ししてくれた。また、プロ棋士が、解説等でメディアに出演する機会も格段に増加し、その個性的な一面を観ることは楽しいし、当然人気も集まっているようだ。「観る将」歴数十年の同僚がいるが、動画サイトで終日におよぶ棋戦を生中継すると最初に聞いたときは、ウソではないかと思ったと言っていた。19歳の天才の出現は、将棋界と私を含めてそれを取り巻く環境に大きな変化をもたらした。

昨年藤井さんは18歳で最高段位の九段まで昇り詰め、渡辺明名人を初戦から三連勝で下し棋聖を防衛し、さらに豊島将之竜王から同じくストレートで竜王位を奪取した。竜王は段位免状に直筆でサインを行う。藤井竜王の誕生で、免状の申請者も増加するかもしれない。私も今では藤井四冠の実力に魅せられている。今年は早々から彼の五冠への挑戦が始まる。「観る将」の一人として、藤井さんの今後のさらなる活躍と、将棋界のますますの進歩が楽しみでならない。

## The Show Must Go On

監事 外園 光一

この楽曲から思い出す洋楽グループは「スリドッグナイト」、「クイーン」などであるが、1960年代前半から現在まで半世紀以上、一度も解散することなく第一線で活躍を続ける、ロック界の最高峰に君臨するバンド「ローリング・ストーンズ」のツアーについてである。

バンドの中心はミック・ジャガーとキース・リチャーズであるが、オリジナルメンバーの一人であるドラムのチャーリー・ワッツが、本年8月に80歳で亡くなった。ワッツはもともとジャズ志向であるが、ストーンズにおいてはシンプルなドラミングでバンドをドライブさせ、スネアを叩くときにハイハットを抜くスタイルは彼の代名詞でもあった。

過去の来日公演で1973年は過去の大塚所帯を理由に中止（大学生の時でチケットを買ったような記憶が）。実際に行った公演は2006年の札幌ドームでミックが所狭しと走り回っていた。2回目は2014年の東京ドームで至近距離で観ることができた。2010年には日本武道館にて「レディーズ・アンド・ジェントルメン」の映画を大迫力で観た。絶頂期の演奏でもあり、最初の曲で涙腺が緩んでしまった。

バンドのメンバーも高齢であり、ワッツは喉頭癌の既往があった。ミックはあれだけ動き回って酸素を吸ってる様子もなかったが、2019年に重度の大動脈弁狭窄症で経皮的動脈弁置換術（TAVI）を受けている。今回、コロナ禍で中断されていた北米での「ノー・フィルター」ツアーはドラマーにスティーヴ・ジョーダンを迎えて追悼も兼ねて9月からミズーリ州セントルイスで始まった。

2022年には結成60周年を迎える。

